

〔共同研究：天変地異の社会学Ⅳ〕

『ババッド・タナ・ジャウイ』におけるムラピ山 ——精霊と火砕流——

深 見 純 生

はじめに

ジャワのマタラム王家とその当主の正統性を謳うことを主な使命とする宮廷詩『ババッド・タナ・ジャウイ』において、ムラピ山は特別な山である。王家の守護精霊として名高いニャイ・ララ・キドゥルの住処である南の海と対をなす北の山であり、やはり精霊の住処である。そして人の世の動きに感応しかつ影響する特別な山として描かれている。

『ババッド・タナ・ジャウイ』は18世紀から19世紀のマタラム王国の宮廷で謳われ、また書きとどめられた。現在もっとも真正性が高いとされるのは、宮廷詩人ヨソディプロ2世(1756-1844)がパクブウォノ7世(位1830-1858)のために1836年に完成させたもので、大ババッドと通称される。本稿は国際的にもっとも流通しているいわゆるメインスマ版[Ras 1987ab]に依拠するが、そのテキストは大ババッド系統に属している¹⁾。メインスマ版には9回ムラピ山への言及がある。加えて、ムラピ山の名前はないが、その噴火が語られるので合計10回ムラピ山が登場する。このうち最初の4回は一連の語りと捉えることができる。それはマタラムのセナパティとパジャンのスルタンの間のプランバナンの戦いにおいてクライマックスに達する。本稿はこの最初の4回の叙述を具体的にたどりながら、そのなかでムラピ山がどのように描かれているかを明らかにし、あわせていくつかの問題について検討するものである。本研究プロジェクトの枠組みでは、大火砕流がムラピ山の精霊の加護の証として描かれていること(第4節)がとくに注目される。

1. マルチャパダにおける精霊の王が支配する地

「これはジャワの国の王たちの歴史である」という劈頭の一節で始まる『ババッド・タナ・ジャウイ』は、預言者アダムに始まりマタラムの王に至るまでの壮大な系譜を語る。アダムを初代として数えると第7代²⁾のバタラ・グル³⁾には5人の子があり、その第4子のバタラ・

1) 『ババッド・タナ・ジャウイ』の解題についてはさしあたり筆者の訳稿における解説を参照されたい〔深見 2012-16〕。

2) アダムから何代目かは数え方によって様々な異説がありうるが、本稿では筆者の仮の数え方による。

ウイスヌと第2子のバタラ・ブラマがマルチャパダつまり大地あるいは人間世界に降ろされる。その様子を第3章「バタラ・ウイスヌとバタラ・ブラマからパジャジャラン王国までのジャワの諸王の系譜」⁴⁾の冒頭が次のように語る [Ras 1987a: 11; Ras 1987b: 11; 深見 2012-16(1): 157]。

サンヒャン・ナラダのバタラ・グルへの進言によって、バタラ・ウイスヌはマルチャパダ Marcapada に降ろされ、精霊の王となって8つの場所を支配した。ムラピ Merapi 山、パマンティンガン Pamantingan, カバレヤン Kabareyan, ロダヤ Lo-Daya, クウ Kuwu, ウリンギン・ピトゥ Wringin-Pitu, カユ・ランデヤン Kayu-Landheyan, ロバン Roban である。

バタラ・ブラマはマルチャパダに降ろされ、ギリウシ Giling-Wesi の国で王となり、プラブ・ワトゥグヌンを継いだ。ジャワの島は服従した。やがてバタラ・ブラマは娘をえて、ブラマニと名づけた。

バタラ・ウイスヌとバタラ・ブラマが地上に降ろされて、ここからいよいよ天上世界の物語（あるいは天上世界と地上世界を行き来する物語）からジャワの大地の物語に移行するのである。その際、バタラ・ウイスヌが精霊の王になったのに対し、バタラ・ブラマの子孫がジャワの王となり、その系譜がマタラム王家へと連なる。このことは、ジャワの諸王はジャワの精霊の諸王と同族であるという位置づけが与えられていることを意味する。バタラ・グルはジャワにおけるシヴァ神の別名ないし化身なので、ジャワの（マタラムの）諸王はシヴァ神の子孫であると位置づけられていることにもなる。なお、マルチャパダの語は『ババッド・タナ・ジャウイ』ではここに記されるだけで、他の部分にはみえない。

バタラ・ウイスヌが精霊の王となって支配した8つの場所が列举され、その最初がムラピ山である。他の7箇所のうちウリンギン・ピトゥはここを含めて2回、パマンティンガンはここを含めて3回述べられるが、他の地名はここにしかみられない⁵⁾。ウリンギン・ピトゥ

3) バタラ・グルについて。バタラ・グルはよく言われるとおりヒンドゥー教のシヴァ神の別名ないし化身であろう。その子とされるウイスヌとブラマはヴィシュヌとブラフマーのジャワ語への訛化である。古代ジャワにおいてシヴァがとくに有力であったことはヒンドゥー寺院のほとんどがシヴァを主神とすることに表れているが、この伝承においてもヴィシュヌとブラフマーより上位に位置づけられており、これは古代ジャワの伝統を継承しているのであろう。

4) 『ババッド・タナ・ジャウイ』の本文には元来韻律の変化以外の区切りは存在しない。メインスマ版は散文なのでこの区切りも存在しない。これを全124章に区分し各々にタイトルをつけたのは、同じく大ババッド系統に属するパライプスタカ版の編者であり [Ras 1987b: XXV], 本稿はこれに従っている。

5) ウリンギン・ピトゥとパマンティンガンは管見の限りジャワには実在しない。その他の5つの地名のうち3つはジャワに実在する。ロダヤは東部ジャワのプリタル県 Blitar 県にロダヤ郡があり、中部ジャワのプマラン Pemalang 県プマラン郡にロダヤという集落がある。中部ジャワのグロボガン Grobogan 県グロボガン郡にクウという集落があり、中部ジャワのバタン Batang 県にロバン川がある。しかし、これら実在の地名が『ババッド・タナ・ジャウイ』のこの部分に関係するのかが筆者には不明である。なおロバンは他の作品に地名として登場する [Brandes 1920: 220]。カバレヤンとカユ・ラ

は7本の榕樹（ガジュマル）の意味であるが、第1章でバタラ・グルの逆鱗に触れて王位を追われたバタラ・ウイスヌが苦行をした場所である。パマンティンガンは、第5章「ラデン・ススルがバジャジャランから逃亡しマジャパイトに定着」において、アジャル・チュマラ・トゥンガルの予言の中でムラピ山と対をなして言及される、マタラム王国にとって重要な場所である（次節参照）。パマンティンガンはまた第15章「ドゥマックのモスクの建設」においてスナン・カリジャガの参籠先である。スナン・カリジャガはジャワの初期イスラム聖人のなかでもセナパティのイスラム教の師匠として（第33章）マタラム王家ととくに縁が深い。このように、精霊の王の支配する8つの土地のうちムラピ山とパマンティンガンがとくに意味をもつのである。パマンティンガンの語義（鍛練の場・修練の場）はスナン・カリジャガの参籠先にふさわしいが、後に取り上げるニヤイ・ララ・キドゥルの宮殿の場所としては違和感がある⁶⁾。

小結。ムラピ山（およびパマンティンガン）はジャワにおいて精霊の王の支配する場所として登場し、かつその王はマタラム諸王と遠い祖先（アダムからシヴァ神まで）を同じくするものとされている。

2. 南 海 北 山

アダムを初代として第36代からバジャジャラン王国が始まり、第40代のスリ・パムカス王は庶子のシユン・ワナラ（別名アルヤ・バニヤックウイデ）に殺され、嫡子のラデン・ススルが都バジャジャランから東の方へ落ちのびてゆく。第5章「ラデン・ススルがバジャジャランから逃亡しマジャパイトに定着」によれば、その逃避行においてアジャル（賢者、修験者）に出会い、取るべき道を教えられ、予言を与えられる。このアジャルはもとはバジャジャラン王の妹であったが、結婚を拒否して出奔しアジャルになったのであり、前半の指示は男装のアジャルの語りだが、後半の予言は女性のアジャルの言葉である [Ras 1987a: 16; Ras 1987b: 17; 深見 2012-16(2): 60-61]。

アジャル・チュマラ・トゥンガルはラデン・ススルを迎えたとき、すでにその望みがわかっていた。キヤイ・アジャルはラデン・ススルにまっすぐ東にいてみるよう助言を与えた。もし1本だけのマジャの木を見つけ、ひとつだけ実がついていて、それが苦かったら、そこに落ち着きなさい。その地は将来大きな町になる。ラデン・ススルはジャワの国の王たちの始祖たる王になるだろうし、バジャジャランの王に復讐するだろう。

ンデヤンは管見の限り実在しない。カバレヤンの語義は筆者には不明である。カユ・ランデヤンは槍やクリスの柄や握りの木の意味である。

6) バライプスタカ版でもパマンティンガンである。なお、南岸のパラントリティスのすぐ西にマンチンガン Mancingan というよく似た名前の集落があるが（語義は釣魚）、この集落との関係について筆者には不明である。東部ジャワのガウイ Ngawi 県とルンバン Rembang 県にマンティンガン Mantingan という地名があるが南海の王宮に関連づけるには無理がある。

ところでアジャル・チュマラ・トゥンガルだが、根っからのアジャルだったわけではない。もとはパジャジャランの王女であり、ラデン・スルの祖父の妹にあたった。都から逃げてアジャルになった理由は結婚が嫌だったからで、どれほど多くの王たちが求婚して拒絶されたことか。都パジャジャランを逐電するとまっすぐコンバン山に向かった。そこにチュマラの木が1本〔トゥンガル〕だけ生えていて、これがアジャル・チュマラ・トゥンガルと名の由来である。〔中略〕

アジャル・チュマラ・トゥンガルはさらに助言した。ラデン・スルが王となりジャワの国をすべて支配したなら、私たちは再会するでしょう。そしてキヤイ・アジャルは砂の海に居を移し、そこで王となり、たくさんの精霊を支配します。つづいて居を移してパマンティンガンに王宮を構え、貴方に服従するでしょう。貴方の子孫は、パマンティンガンの北、ムラピ山の南に宮廷を構えるでしょう。そしてジャワの国に王たる者はすべて、私と結婚するでしょう。最後にラデン・スルは、もし将来困難に陥ったならアジャル・チュマラ・トゥンガルを呼ぶようにしなさいと指示された。きっと精霊の全軍を率いてすぐに助けにやってくると。助言が終わるとラデンはシンガサリの国にむけて出立するよう促された。

こうしてラデン・スルがマジヤパヒト国の始祖となり（アダムから数えて第41代目）、パジャジャランを滅ぼした。マジヤパヒトは7代続き（同第47代まで）、ついでジャワの王位はドゥマックに移った。ドゥマックの王位は3代でパジャンのジャカ・ティンキルに移った（同第51代）。パジャンの覇権は1代限りで、ジャワの王位はマタラムのセナパティに移ることになる。セナパティにジャワの正統な王位が移るについて先の予言とムラピ山が重要な役割を担っている。

アジャル・チュマラ・トゥンガルの予言を語られる順に箇条書きにしてみる。

- 1 ラデン・スルが王となりジャワの国をすべて支配したなら、2人は再会する。
- 2 アジャル・チュマラ・トゥンガルは砂の海に居を移し、そこで王となり、たくさんの精霊を支配する。
- 3 つづいて居を移してパマンティンガンに王宮を構え、ラデン・スルに服従する。
- 4 ラデン・スルの子孫がパマンティンガンの北、ムラピ山の南に宮廷を構える。
- 5 ジャワの国に王たる者はすべて、アジャル・チュマラ・トゥンガルと結婚する。
- 6 将来困難に陥ったら、アジャル・チュマラ・トゥンガルを呼びなさい。きっと精霊の全軍を率いてすぐに助けにやってくる。

これ以後の物語の中でアジャル・チュマラ・トゥンガルは登場せず、したがってラデン・スルとの再会すなわち第1点と第3点が語られることはない。その他の第2点、第4点、第5点は、後に第32章に至ると、そこで語られるニヤイ・ララ・キドゥルがアジャル・チュマラ・トゥンガルと重ね合わされていることがわかる。第6点の約束もニヤイ・ララ・キドゥ

ルによって繰り返される。アジャル・チュマラ・トゥンガルは後にニヤイ・ララ・キドゥルとなって再登場し、アジャル・チュマラ・トゥンガルの予言の一部分はニヤイ・ララ・キドゥルによって実現されることになるのである（次節参照）⁷⁾。

小結。マジヤパヒトの始祖となるラデン・ススルへのアジャル・チュマラ・トゥンガルの予言のなかで、パマンティンガンの北、ムラピ山の南つまりマタラムの地においてラデン・ススルの子孫がジャワの王になることが語られる。それがセナパティであることは次節で取り上げる。

3. セナパティは南海へ、ジュルマルタニはムラピ山へ

セナパティの父パマナハンはパジャンのスルタン・アディウイジャヤ（旧名ジャカ・ティンキル）に仕えていて、仇敵アルヤ・パナンサンを倒した報奨としてマタラム地方を与えられ、バサルグデ（コタグデ）に館を構えた⁸⁾。パマナハンが亡くなりマタラム太守の地位を継承したセナパティは、ムラピ山の東に位置するパジャンから遠い、ムラピ山の西方地域への勢力拡大を図っていた。

そんなある夜セナパティは館を抜け出してリプラ⁹⁾というところで岩の上で寝ていた。叔父（母のキョウダイ）のキヤイ・ジュルマルタニが追いついてみると、そこに星が落ちてきた。少し長いが、セナパティが南海へ、ジュルマルタニがムラピ山へ向かうまでの全文をあげておこう。第32章「セナパティとニヤイ・ララ・キドゥルの邂逅」である。〔Ras 1987a: 75-77; Ras 1987b: 78-79; 深見 2012-16(5): 253-254〕。

その時天から星が落ちてきた。外皮の付いたままのココヤシの大きさと、激しく光り輝き、セナパティのそば、その枕元に落ちた。キヤイ・ジュルは恐懼して息子を起こした。「セナパティよ、早く起きろ。それは一体何だ、枕元に、月のように輝いているのは」。セナパティはびっくりして目を覚ますと、それを見て言った。「お前は一体何だ。わしの寝ている枕元にそんなに輝いて。生れてこの方見たことがない」

星はすぐに人間のように答えた。「よいか、わしは星である。お前に伝える。聖なる思し召しの在り処を見通したいとお前の願いはすでにアラーに受け入れられた。お前の願いは聞き届けられた。お前は王となってジャワ世界を支配し、子や孫に至るまでマタラムにおいて比類なき王となり、敵に恐れられ、黄金と宝石に富むだろう。やがてお前の曾孫はマタラム最後の王になる。そして王国はバラバラになる。月食と日食が頻発

7) アジャル・チュマラ・トゥンガルまたはニヤイ・ララ・キドゥルとジャワの王の関係や精霊の助勢が語られるのはマジヤパヒトとマタラムに限られる。マジヤパヒトの覇権がドゥマックとパジャンを経てマタラムに至るとはいえ、ドゥマックとパジャンについてはアジャル・チュマラ・トゥンガルやニヤイ・ララ・キドゥルとの関わりは語られない。このことは、ドゥマックやパジャンではなくマタラムがマジヤパヒトの正統な後継者に位置づけられていることを意味している。

8) これが史実だとすれば1578年と推定される〔深見 2011〕。

9) リプラ Lipura。この地名も管見の限り実在しない。

する。夜な夜な彗星が現れる。山々は爆発し、灰の雨が降り、火砕流が起こる。これは王国が没落する兆しである」

星は言い終わると姿を消した。セナパティは心の中で思った。「アラーへの我が願いはいまや聞き届けられた。父スルタン¹⁰⁾の後を継いで王となり、子や孫に至るまでジャワの国の明かりとなって輝く。ジャワ国の人はみな服従するだろう」

キヤイ・ジュルはその心の内がわかって言った。「セナパティよ、傲るでない。まだ起きもせぬことを当てにするでない。それは正しくない。あの星の言うことを信じたりすると、お前は誤る。なぜなら、あれは運命の声というもので、虚実定かでない。人間のような舌先に捕らわれてはならぬ。それに、お前がいつかパジャンの者たちと戦争することになった時、お前はこの星に約束を守らせたり、助けを求めたりできないのだ。わしとお前が自力で戦うほかないのだ。勝てば、お前はきっとマタラムで王位につく。負ければ、きっと獄につながれる」

セナパティは叔父の言葉を聞くと、きまり悪げに訊ねた。「叔父上、どのような助言をいただけましようか。それに従います。私めは船、叔父上が舵でございます¹¹⁾」

キヤイ・ジュルは言った。「セナパティよ、わしの言うことを聞くのであれば、さあ、あらゆる困難を容易にしてくださるよう主アラーに懇願しよう。さあ、分担しよう。お前は南海へ行け、わしはムラピ山に登る。アラーの思し召しを訊いてみよう。さあ、今ともに出立しよう」

こうしてキヤイ・ジュルはムラピに出立し、セナパティ・ガラガは真東に進みオパツク川にくると、水に飛び込み、仰向けになって流れに任せて下っていった。

『ババッド・タナ・ジャウイ』では星または星の如き光輪が今後のまたは将来のジャワの正統な王座の所在をしめすという語りが何度か繰り返されるが¹²⁾、ここでも星がセナパティの将来の王座を予言する役割をになっている。ここにはまた星ないし星の如き光輪の位置づけの他にもイスラムの立場と非イスラムの立場の相剋という問題があるが、これは差し当たり同じ部分を取り上げている青山亨の解説に任せて〔青山 2004: 44-45〕先に進むことにしよう。

10) セナパティは若くしてパジャンのスルタン・アディウイジャヤの養子になっていた。

11) 船と舵のたとえについて。このたとえにセナパティとジュルマルタニの関係がよく表現されている。セナパティが主人公であるが2人は不可分の関係にあり、マタラム王国の建国は2人の共同作業であることを表現している。その後の王国の内乱の多くが伯父・叔父と甥の間の王位継承の争いであることを踏まえると、この両者の協力関係は興味深い。

12) 星について。星あるいは星の如き光輪が落ちたところに王権が移ることの意味は別途議論するに値するであろう。『ババッド・タナ・ジャウイ』で用いられる単語はアラビア語源のワフユ wahyu もあるが、ジャワ語のヌルブワット nurbuwat, アンダル andaru, プルン pulung 等がある。この第32章では一般的に星を意味する語リントン lintang が用いられている。

星ないし光輝が王権と結びつけられるのはイスラムの受容に始まるというよりおそらくジャワ本来の思想であろう。とすれば、ここでは星の語りとその解釈の中にアラーが入り込むという形でジャワのイスラム化が表れていると考えることができる。

星の予言を真に受けたセナパティは王になる期待に昂ぶるが、ジュルマルタニはパジャンと戦うときに星に約束を実行させたり助けを求めたりできないと現実的な忠告をする。星の言葉など虚実定かではなく当てにならないとして、「主アラーに懇願」するため、あるいは「アラーの思し召しを訊」くために、おのおの南海と北山に向かうことにする。その南海でセナパティはニヤイ・ララ・キドゥルと出会うことになる。

ジュルマルタニの言葉の中にすでにパジャンとの戦いが予言されていて、それは第35章で語られる。次節で取り上げるように、その戦いにおいて実際に星や星の言葉は姿を現さない。

星の予言の中にムラピ山の爆発が語られている。ムラピ山と名指しではないが、マタラム王国の終わり¹³⁾を演出する火山の爆発はムラピ山以外にありえない。セナパティの曾孫がマタラム最後の王になること、すなわちマタラム王国はセナパティから数えて4代目で滅亡すると予言している。じじつセナパティの曾孫であるマンクラット1世(位1646-1677)の治世末年の1677年に王国が崩壊し、パジャン地方のカルタスラに新しい王都が建設されるのであり、この王国の没落と火山の爆発は第68章で語られる。

セナパティは南海の女王ニヤイ・ララ・キドゥルに出会う。彼女はセナパティへの服従を表明し、セナパティとその子孫がジャワの比類なき王となることを予言し、敵が現れたなら、ジン、プリ、プラヤンガンといった彼女の支配するジャワのすべての精霊が援軍に駆けつけると約束する。女王はセナパティを海底の宮殿に誘い、3日3晩愛し合う。彼女はこの間にセナパティに人間と精霊を支配する王のわきまえるべき振る舞いを教授した。セナパティは最後に援軍を呼ぶ方法を教えられ、マタラムに戻る。

第2節で述べたように、アジャル・チュマラ・トゥンガルの予言の一部はニヤイ・ララ・キドゥルにより実現されることになる。第4点のいうマタラムの王宮は、ラデン・スルの子孫をセナパティと読み替えれば、その王宮はすでに存在するとみることもできるし、やがてパジャンのスルタンの死後に全ジャワを支配する王宮が実現するとみることもできる。

第5点のジャワのすべての王との結婚は少し説明が必要である。ニヤイ・ララ・キドゥル

13) マタラム王国の最後について。現在一般的な歴史叙述では、1755年にスラカルタ王国とジョクジャカルタ王国に二分されたことをもってマタラム王国の終焉とみなすことが多い。その一方でマタラム王国はインドネシア共和国が独立する1945年まで続いたとすることもある。しかし事情はもう少し複雑である。

マタラムの王宮はパマナハンがパジャン支配下の領主としてマタラムに入った時からセナパティ、クラブヤックまで3代はコタグデにあった。ついでスルタン・アグン(位1613-1646)が1614年その3キロほど南のクルタに王宮を移し、マンクラット1世は1647年クルタの東方1キロのプレレッドに移転した。3箇所ともマタラム(ジョクジャカルタ)地方に位置する。反乱のため王都が破壊されると、マンクラット2世(位1677-1703)は荒廃したマタラム地方を捨てて、1680年パジャン地方に新都カルタスラを造営し、こうして王国の中心はマタラム地方を離れた。ついで1740年代の内戦でこの王都も荒廃し、バクブウォノ2世(位1726-1749)は1746年その東12キロのソロ村に新都スラカルタを建設した。一連の内乱のなかで1755年王国は二分され、ジョクジャカルタ王国が建国された。

王都の所在地を王国の名前とする『ババッド・タナ・ジャウイ』などジャワの文献の伝統に従うなら、マタラム王国(1677年まで)、カルタスラ王国(1680-1746年)、スラカルタ王国(1746-1945年)、そしてジョクジャカルタ王国(1755-1945年)と遷移したとみるべきである。この引用に言うマタラム王国の最後はこの意味でのマタラム王国である。

は『ババッド・タナ・ジャウイ』では3回登場するにすぎない。(1) セナパティとの邂逅、(2) プランバナンの戦い(第35章=次節)、(3) スルタン・アグンとの結婚(第61章末尾) [Ras 1987a: 140; Ras 1987b: 145; 深見 2012-16(9): 302-303] である。したがって、第5点はアジャル・チュマラ・トゥンガルをニヤイ・ララ・キドゥルに読み替えても、結婚が具体的に語られるのはセナパティとスルタン・アグンだけである。ニヤイ・ララ・キドゥルがマタラムの王たちすべてと結婚するという、現在のジャワでもよく語られる伝承は、『ババッド・タナ・ジャウイ』においてはニヤイ・ララ・キドゥル自身が言うのではなくアジャル・チュマラ・トゥンガルによって語られているのであり、ニヤイ・ララ・キドゥルのセナパティおよびスルタン・アグンとの結婚によって表現されていることになる。なおスルタン・アグンとニヤイ・ララ・キドゥルの結婚の叙述はたいへん簡潔である。

第6点の精霊の援軍についてニヤイ・ララ・キドゥルは約束を繰り返すだけでなく、どうすればよいのかというセナパティの問いに答えて、そのための具体的な所作を教える。彼女は次のように言う。「それはまったく簡単なことでございます。あなた様が私めをお呼びになりたければ、腕を胸の前で交差なさり、両足をピッタリ揃えてお立ちになり、目を天にお向けになるのです。私めはすぐに馳せ参じます。ジンたち、プリたち、ブラヤンガンたちの軍隊が武器を携えて一緒にやっ来てまいります」

このセナパティとニヤイ・ララ・キドゥルの邂逅の話は青山の言うとおり、結婚という契約によるマタラム王家に対する土着精霊の服属の物語として読むことができる [青山 2004: 46]。ジャワ島南岸各地に様々なニヤイ・ララ・キドゥル伝承が存在しており、それら土着の民話が『ババッド・タナ・ジャウイ』において王家の正統性を語る国家伝承にいわば格上げされたということもできる [中島 1993: 16-24参照]。

南海における邂逅はかなり詳しく語られ、メインスマ版のジャワ語で2頁余りに及ぶ(77-79頁)。これに対してムラピ山に向かったジュルマルタニについては一言も語られない。しかしジュルマルタニもまたムラピ山で精霊を味方につけたことは次節でみるように、プランバナンにおけるパジャンとの戦いの場面で明らかになる。

小結。アラーの使者らしき星によってセナパティの将来の王位が予言されるが、ジュルマルタニはそんなものは当てにならないと論じ、確かなものを求めてセナパティは南海へ自身はムラピ山へゆく。セナパティはニヤイ・ララ・キドゥルとの結婚をとおしてジャワの精霊の服属あるいは支援の約束をえた。しかしジュルマルタニとムラピ山については語られない。

4. プランバナンの戦い

セナパティの勢力拡大が本格化すると、パジャンのスルタンは出陣し、その無数の大軍がプランバナン一帯を埋めつくした。このプランバナンの戦いは第35章「パジャンの後宮におけるラデン・パベラン。その父トゥムンゲン・マヤンがマタラムに追放される」の末尾から第36章「パジャンのスルタンが死に女婿であるドゥマックのアディパティが継ぐ」の初めに

かけて次のように語られる〔Ras 1987a: 87-88; Ras 1987b: 90-92; 深見 2012-16(6): 174-176〕。

セナパティ・ガラガとその800人のマタラム軍は迎え撃とうと、ランドウラワンに出陣し警戒を怠らなかつた。キヤイ・ジュルはセナパティに言った。「セナパティよ、わしの願いは、お前がスルタン陛下との対戦に至らないことだ。お前の軍はわずかばかりで、パジャン軍は数えきれないのだから、きっと殲滅される。またわしは、パジャンの者たちを見るのがとても恥ずかしい。さあ、パジャンの者たちの心胆が寒くなるよう、ともにアラーに懇願しよう。お前はニヤイ・キドゥルに約束をかなえるよう求めよ、わしはムラピの精霊たちに約束を守るよう求めよう。そしてお前の軍勢の一部をグヌン・キドゥル〔南山〕に陣取らせよ。そこの樹をたくさん伐って、射程距離の間隔を置いて山並みに並べ、今夜一斉に火をつけさせよ」

じじつこのように行われた。日が沈み夜になると、セナパティは立ち上がって腕を胸の前で交叉させ天を仰いだ。キヤイ・ジュルも同じようにした。たちまち雨が降り風が吹き始めた。多くの樹木が裂け、また根こそぎ倒れた。轟音が天空を満たした。これはジンたち、プリたち、プラヤンガンたちがこぞって援軍にくる前兆だった。さらにムラピ山が燃えた。その音は恐ろしげに轟きわたった。そして灰の雨が降った。オパック川に火砕流が流れた。巨大な岩がたくさん地面に跳ね上がった。キドゥル山地では薪の山に火がつけられ、山地がひとつの火の海ようになった。そしてキ・ビチャックという名の小型の銅鑼¹⁴⁾が絶え間なく打ち鳴らされた。

スルタン陛下はちょうどオパック川近くに宿営し、ブパティたちに対面していた。スルタン陛下は静かに言った。「ブパティたちよ、キドゥル山地が炎の中にあるのが見える。ムラピ山もまた燃えている。そしてこの天空の音は一体何だ。進撃する軍隊のような音だ。心底恐ろしげではないか」。トゥバンのアディパティが落ち着いて言った。「陛下、陛下のお言葉はみなを不安がらせませぬ。耳にしておられるのは雨と風の音で、心配なさるようなものではございません。のみならず、パジャンの家臣にセナパティと戦うのを恐れる者は一人もおりませぬ。ひとたび陛下のご命令が下されますれば、マタラムの者たちは私とパジャン勢によって一瞬のうちに壊滅いたします」。〔中略〕

ほどなく火砕流が陣営を襲った。大きな岩がパジャン軍に押し寄せてきた。パジャン軍は大混乱となり、命からがらでんでに逃げ出した。スルタン陛下とブパティたちはこの動きに流された。敵に襲われたと思ったのだ。大軍がたちまち姿を消した。

朝になってスルタン陛下はトゥンバヤットに至ると、聖墓にお参りしたかった。しかし墓地の門に鍵がかかっているとお参りできなかつた。スルタン陛下は門に口づけしただ

14) 勝利を呼ぶ小型の銅鑼キ・ビチャック ki Bicak の由来は第24章で語られ、その後プランバナの戦いを含めて4回言及される〔Ras 1987a: 45, 87, 112, 269, 300; Ras 1987b: 47, 91, 116, 278, 311〕。

けだった。それが終わると墓地の鍵番に言った。「墓守よ、墓地の門の鍵が開かないとはどうしたことだ」。墓守は答えた。「スルタン陛下、私めの思いますに、陛下はもはや主アラーから王たることを許されておられないのです。この墓地の門が閉ざされて開かないのはその表れでございます」

ジュルマルタニがパジャンとの戦いを予見していて、その戦いにおいて星をあてにできないと考えていたことは第3節でみたとおりである。ここにはイスラムとジャワという2つの価値観の相剋が現れていて興味深い。ジュルマルタニの言葉は的中し、助けになったのは星やその言葉ではなく、ニヤイ・ララ・キドゥルの精霊の軍隊とムラピ山の精霊の加護であった。星を通じてアラーの思し召しが伝えられているとされたのだが、頼るべきはイスラムではなくジャワの精霊だと認識され、じじつその甲斐あってセナパティとジュルマルタニは戦いに勝利した。さらに、トゥンバヤットでは墓守にアラーの思し召しを語らせているが、南海北山のジャワの精霊の加護というジャワ的なコンテクストにおいてセナパティの覇権が確立してゆき、この過程においてイスラムは副次的な役割しか与えられていないかのようである。本稿ではジャワ主義とイスラム化の問題にこれ以上立ち入らないことにしたい。

セナパティが寡勢よくパジャンの大軍に勝利しえたのは（グヌン・キドゥル＝南山を火の海にするというジュルマルタニの策略もあるが）ニヤイ・ララ・キドゥルとムラピ山の精霊の加護による。その際ニヤイ・ララ・キドゥルの精霊の援軍は目に見えず音だけなのに対して、ムラピ山は大噴火という目に見える激しい形をとり、その火砕流がパジャンの陣営を襲ったことが勝利を決定的にした。精霊の援軍の行軍の音はスルタンを不安がらせたけれども、配下の武将たちは意に介さず強気であった。しかし、激しい火砕流に襲われてパジャンの大軍は雲散霧消したのである。

敗残のスルタンはトゥンバヤットで一泊してパジャンに戻るが、途中で病をえて程なく病床で亡くなる（次節参照）。ジャワの覇権のセナパティへの移動は目前である。

セナパティはニヤイ・ララ・キドゥルとの別離の際に約束されたジンたち、プリたち、ブラヤンガンたちの援軍を呼ぶための合図の所作をした。ジュルマルタニも同じ所作をした。これによってムラピ山の精霊の加護がえられた。ジュルマルタニがムラピ山で何をしたのか語られなかったけれどもムラピ山の精霊から約束を取り付けていたのである。

小結。ムラピ山の精霊の加護はバタラ・ウィスヌとバタラ・ブラマがマルチャバダに降ろされて以来約束されていたとはいえ、こうしてプランバナンの戦いにおいて、マタラム王国の守護精霊の住処としてのムラピ山の物語はクライマックスに達した。最初の3回のムラピ山への言及はこの4回目のための伏線と読めないこともない。ただし、南海の精霊の加護はセナパティの女王との結婚により獲得されたことが語られるのに対して、プランバナンの戦勝において決定的だったムラピ山の精霊の加護がどのようにして獲得されたのは語られていない。

5 ジュル・タマン

ここでいったん『ババッド・タナ・ジャウイ』を離れて、セナパティがムラピ山の精霊たちの加護を得る経緯を語る別の伝承を取り上げたい。現在ジョクジャカルタの王宮ではスルトンの誕生日翌日などにラブハンとよばれる儀礼を行う。王子や王女の婚姻などの際には小規模に南岸のパランクスモでのみ行われ、スルトンの誕生日翌日のラブハンとは通常パランクスモ、ムラピ山、ラウ山の3箇所で行われ、8年に1度の大祭の場合はドレピ・カヒャンガン（ウォノギリ県）を加えて4箇所で行われる〔Purwadi 2007: 265-272〕。1941年まではスルトンの即位記念日の翌日に行われていたが、1942-1949年は時代状況ゆえに行われず、1950年に再開されたときからスルトン・ハムンクブウォノ9世（位1939-1988）はオランダ支配下の即位であったことを忌避して、誕生日翌日に変更した〔Purwadi 2007: 267-268〕。このことはラブハンが本来はスルトンの即位と結びつけられていたことを意味する。パランクスモはセナパティがニヤイ・ララ・キドゥルと出会った場所でありその海底の宮殿への玄関口とされ、このラブハン儀礼は南海の女神に供物を捧げるものである〔cf. Argo 2006: 98-103; 中島 1993: 16-24参照〕。

ムラピ山では南側の中腹、最後の集落キナルジョ村から上がるとラブハン儀礼のための場所がある。ムラピ山のラブハンの起源譚として概略次のような伝承がある〔Purwadi 2007: 267-268; cf. Lucas 2010: 64〕。

セナパティはニヤイ・ララ・キドゥルに送られて南岸のパラントリティス〔パランクスモの東〕に戻った。そのとき事が順調に進むようにと玉子を与えられ、マタラムに戻ってから食べるようになっていた。マタラムに戻るとキヤイ・ジュルマルタニは、その玉子を食べたらニヤイ・ララ・キドゥルのように精霊になってしまうからと制止した。その玉子は家臣のジュル・タマンに食べるようにと与えられた。玉子を食べたジュル・タマンは精霊の姿に変身した。セナパティは精霊になってしまったこの家臣にグステイ・パネンバハン・サブジャガッドの名前をつけて精霊の支配者としてムラピ山に遣わした。

こうしてムラピ山南斜面の中腹でサブジャガッドはじめムラピ山に住まう諸霊に供物を捧げるラブハンが行われるようになったのである。このようにジュル・タマン改めサブジャガッドがムラピ山の諸々の精霊の支配者として派遣されることでマタラム王家はムラピ山の諸霊との関係を築いたのであるが、その際玉子を介してニヤイ・ララ・キドゥルが役割をになっている。毎年のラブハン儀礼はラウ山を加えた3箇所で行われるが、8年に1度の大祭ではドレピ・カヒャンガンを加えて4箇所で行われる。ラウ山はニヤイ・ララ・キドゥルと無関係だが¹⁵⁾、ドレピ・カヒャンガンはセナパティの苦行の場であるとともにニヤイ・ララ・キドゥルとの邂逅の場とされることを踏まえると〔Purwadi 2007: 266-267〕、ムラピ山の諸霊

に比してニヤイ・ララ・キドゥルの存在感がはるかに大きいといえよう。南海に比してムラピ山の比重が低いことは『ババッド・タナ・ジャウイ』がムラピ山の諸霊の加護を獲得する経緯を語らないことにも通じるのかもしれない。

玉子とジュル・タマンの伝承は『ババッド・タナ・ジャウイ』に取り込まれなかったが、精霊のジュル・タマンは異なる形で『ババッド・タナ・ジャウイ』に登場する。前節で述べたようにパジャンのスルタンは敗走の途中で病をえて病床にあった。これを追尾したセナパティは攻撃することなくパジャンの王宮前広場で様子を見守っていた。そこにセナパティのお気に入りの従者であるジンのジュル・タマンが現れた。セナパティにだけ見えて他の者には見えなかった。ジュル・タマンは「ご主人様、スルタン陛下を亡き者になさりたいのであります。お命じください」と言上した。セナパティはこれに対して「ジュル・タマンよ、申し出はありがたいが、わしはそのような願望をもっておらぬ。しかしお前がそのつもりなら、すきにせよ。それをお前に求めぬが、禁じもしない」と答えた。誰にも見えないジュル・タマンは王宮に入り、妻子に見守られて病臥しているスルトンの胸の上に座った。ためにスルタンは意識を失い、まもなく息を引き取った〔Ras 1987a: 89; Ras 1987b: 93; 深見 2012-16(6): 178-179〕。

『ババッド・タナ・ジャウイ』ではニヤイ・ララ・キドゥルの玉子は語られず、セナパティのムラピ山の精霊とのつながりも語られず、この場面で初めて登場する家来のジュル・タマンは当初からジンである。2つの伝承の中のジュル・タマンが同一人物であるのかどのような関係にあるのは不明であるが、いずれにせよ『ババッド・タナ・ジャウイ』だけではセナパティとムラピ山の関係が明らかにならないこと、そして『ババッド・タナ・ジャウイ』があらゆる伝承を取り込んだわけではないことは確かである。『ババッド・タナ・ジャウイ』が必ずしも事柄の全貌を示さないことはニヤイ・ララ・キドゥルの場合も同様であって、セナパティとの守護精霊としての関係が語られるが、崇りをなす精霊としての側面は語られない。『ババッド・タナ・ジャウイ』はそもそもマタラム王家とその諸王の系譜を語り正統性を主張するものであり、その観点から必要な事柄だけを語ればよいのである。この立場からすればジュルマルタニとムラピ山の精霊との関係は語る必要がないと判断されたのであろう。系譜を語る上で大事なのは、第3節の引用中の言葉で言えば舵のジュルマルタニではなく船セナパティなのである。

小結。ニヤイ・ララ・キドゥルの玉子を食べて精霊となったジュル・タマンに関する伝承がラブハン儀礼の起源譚として存在し、セナパティがムラピ山の精霊の加護を得る経緯を説明している。この伝承が『ババッド・タナ・ジャウイ』に取り入れられなかったのは、王家の系譜と正統性を語るためには不要と判断されたためであろう。ただし精霊のジュル・タマンは異なる形で『ババッド・タナ・ジャウイ』に登場する。

15) ラウ山のラブハン儀礼で供物を捧げる相手は、マジヤパヒトの最後の王ブラウイジャヤが精霊となったスナン・ラウである〔Purwadi 2007: 267-268〕。

おわりに

ムラピ山に関する4回の語りにおいて、まずムラピ山（およびパマンティンガン）はジャワにおいて精霊の王の支配する場所として登場し、かつその精霊の王はマタラム諸王と遠い祖先を同じくするものとされている。ついで、マジヤパヒトの始祖となるラデン・ススルに与えたアジャル・チュメラ・トゥンガルの予言のなかで、パマンティンガンの北、ムラピ山の南つまりマタラムの地においてラデン・ススルの子孫がジャワの王になることが語られる。そしてアラーの使者らしき星によってセナパティの将来の王位が予言されるが、ジュルマルタニはそんなものは虚実定かでない論し、それを確実にするためにセナパティは南海へ自身はムラピ山へゆく。セナパティはニヤイ・ララ・キドゥルとの結婚をとおしてジャワの精霊の服属あるいは支援の約束を獲得した。プランバナンの戦いにおいてセナパティは寡勢よくパジャンの大軍に勝利したが、それはニヤイ・ララ・キドゥルとムラピ山の精霊の加護のおかげであり、とりわけ後者の火砕流が決定的であった。

しかしジュルマルタニがムラピ山の精霊の加護を得る経緯は語られない。それを知るには他の伝承を参照する必要がある。マタラム諸王の系譜と正統性を謳う『ババッド・タナ・ジャウイ』は歴史の全体像を示す作品ではないのである。『ババッド・タナ・ジャウイ』において主役はセナパティであってジュルマルタニは脇役にすぎない。したがってセナパティとの結婚をとおしてジャワの精霊の加護を約束したニヤイ・ララ・キドゥルの存在感が大きくなり、ムラピ山の精霊の役割はプランバナンの戦いでは重要だったけれども詳しくは語られないのである。

最後に天変地異と王権の関係について一言しておきたい。以上の語りにおいてマタラム王権は南海北山の土着精霊の王との関係をとおして天変地異（ここでは火砕流）と関わる事が表されている。こうして王権と王国の安寧のためにジャワの王は土着精霊の支配者との良好な交わりを欠かしてはならないとされるのである〔深見 2014参照〕。

なお、本稿は桃山学院大学共同研究プロジェクト「天変地異の社会学Ⅳ」（14連239）および科研「ジャワ語文献に見られるジャワの言語・文化の変容過程」（代表者東京外国語大学教授宮崎恒二、2013～2016年度、25283003）の研究成果の一部である。

参考文献

- 青山亨 2004「南海の女王ラトゥ・キドゥル——一九世紀ジャワにおけるイスラームをめぐる文化的表象のせめぎあい」『総合文化研究』8: 35-58.
- 中島成久 1993『ロロ・キドゥルの箱——ジャワの性・神話・政治』風響社
- 深見純生 2011「マタラムの建国年次について——『ババッド・タナ・ジャウイ』という文学と歴史のはざま」『国際文化論集』（桃山学院大学）44: 29-48.
- 深見純生 2012-16「ババッド・タナ・ジャウイ（1）～（10）」『国際文化論集』（桃山学院大学総合研究所）45-49、『人間文化研究』（同）1-5.
- 深見純生 2014「ジャワにおける天変地異と王の神格化」『桃山学院大学総合研究所紀要』40-1: 81-100.

- Argo Twikromo 2006, *Mitologi Kanjeng Ratu Kidul*, Nidia Pustaka, Yogyakarta.
- Bekel Enom Asihono Maridjan dan Budiman 2011, *Legenda Mbah Maridjan dan Gunung Merapi*, Kinahrejo Production, n. p. (Kinahrejo, Yogyakarta), n. d. (2011).
- Lucas Sasongko Triyogo 2010, *Merapi dan Orang Jawa: Persepsi dan Kepercayaannya*, Grasindo, Jakarta.
- Purwadi 2007 *Ensiklopedi Adat-Istiadat Budaya Jawa*, Panji Pustaka, Yogyakarta.
- Ras, J. J. ed. 1987a, *Babad Tanah Jawi: De prozaversie van Ngabehi Kertapradja voor het eerst uitgegeven door J. J. Meinsma en getranscribeerd door W. L. Olthof*, Foris.
- Ras, J. J. ed. 1987b, *Babad Tanah Jawi: Javaanse rijkskroniek: W. L. Olthofs vertaling van de prozaversie van J. J. Meinsma lopenden tot het jaar 1721*, Foris.

(2017年1月11日受理)

Mt. Merapi as Depicted in the *Babad Tanah Jawi*: Spirits and Natural Disaster

FUKAMI Sumio

The *Babad Tanah Jawi* (Meinsma edition) mentions Mt. Merapi 10 times, of which the first 4 cases constitute a series of stories culminating in a battle at Prambanan between Pajang and Mataram. From the story we find that Mt. Merapi houses spirits that originate from the same ancestor as that of the Mataram kings, that Mt. Merapi and human society correspond with each other, that Mt. Merapi to the north of the Mataram kingdom seems to be an equal partner of the Southern Sea as protector of the kingdom, and lastly that the ruler of the spirits of Mt. Merapi is, however, not mentioned in the *babad*, unlike Ratu Rara Kidul in the Southern Sea, who is described elaborately as the protector of the kingdom.